



写真-1 大土神社の横を流れる六甲川（平成31年4月撮影）

■ 都賀川上流・六甲川の急な流れ

写真-1 は、神戸市灘区鶴甲3丁目にある大土（おおつち）神社の西を流れる六甲川（正式な河川名は「都賀川上流六甲川」）に建設された連続する3段の砂防堰堤を撮影したものです。河川に長い正式名称がついているのは、武庫川水系有馬川の上流に同名の六甲川があるためで、こちらの正式名称は「有馬川上流六甲川」です。

この砂防堰堤について県の砂防課で調べていただいたところ、堰堤名はついていませんが阪神大水害の1年前の昭和12（1937）年に兵庫県によって建設されたようです。

ただ、無名堰堤というのが気になります。砂防法（明治30年法律第29号）第11条ノ2において、「都道府県知事ハ国土交通省令ノ定ムル所ニ依リ砂防ノ台帳ヲ調製シ之ヲ保管スベシ」とあり、さらに「2 砂防ノ台帳ハ砂防指定地台帳及砂防設備台帳トス」とあります。砂防設備台帳を調製するためには、まず堰堤名が必要です。無名であればこの際、新たに命名してもいいのでは。筆者なら、大土神社の横にあるので「大土堰堤」と名付けますが…。

西六甲山を源とし、およそ1/15の急勾配を有する六甲川は、阪急電鉄神戸線・都賀川橋梁の上流で、右支川の杣谷（そまたに）川と合流して都賀川となり、JR東海道本線の下を潜り、国道2号を横切り、さらに阪神電鉄及び国道43号を横断して大阪湾に注いでいます。

この急な流れは水車を回す大きな力となり、古くから水車産業が盛んで、川に沿って立ち並んだ水車場では、菜種の油搾り、酒米の精米、素麺の原料となる小麦の製粉などの動力として利用されていました。

現在、六甲川沿川に水車場の姿はなく、「水車新田」の地名だけがかつて水車があった歴史を伝えています。



写真-2 大土平町を流れる六甲川（平成31年3月撮影）

■ 水車で搾った菜種油の輸送と郷土の平安を願って建てられた大土神社

大土神社は写真-1の左岸側にあり、江戸時代に村民が水車で搾った菜種油の輸送と郷土の平安を願って建てた神社です。当時、このあたりの水車は主に菜の花から菜種油を搾るのに使われていたようです。そのため、灘区の花は菜の花となっています。

境内に立てられた神社の由緒などが記された案内板(写真-4)には、神社の鎮座地として「灘区鶴甲3丁目、旧水車新田字宮坂」と記されています。水車新田は神戸市灘区の大字の一つで、六甲ケーブル下駅の南西、六甲川と大土平川(おとひらがわ)の合流点付近一帯を指し、平成30(2018)年12月1日時点での住居表示未実施地区※1一覧のとおり残っています。



写真-3 水車のお宮さん〜大土神社



写真-4 大土神社の由緒を記した案内板



写真-5 灘百選の一つ
「水車新田」の説明碑

祭儀(略)

に厳島神社(御祭神 市杵島姫命)を祀る
別社として、川下の字尻屋、現大土平町二丁目

油絞りの水車郷である水車新田の成立に至り、
村民が郷土及び輸送の海路の平安をねがって勧請
し、鎮守の社として祭祀し奉った

以後多くの人々の努力のすえ、六甲川沿いに多数
の水車が建設され、盛時には二十五輦に達した
これら水車によって菜種から灯油を搾り、新在家
の浜から盛んに江戸へ船積みした

由緒

神社の建立は、桃園天皇の御代、寛延元年(一
七四八年)である これより以前、享保九年(一七
二四年)から、六甲川谷筋の此の地で先覚者によ
り、水力の利用を目的とした開発が試みられた

菅原道真公

住吉大神

天照大神

御祭神

旧水車新田字宮坂

灘区鶴甲三丁目

大土神社

大土神社の境内から砂防堰堤直下の河原への降り口付近に、水車をイメージした碑(写真-5)が建てられていて、その盤面には灘百選の一つ「水車新田」の説明が記された金属プレートが張り付けられています。説明は以下のとおりです(若干の補足説明を付している)。

江戸時代の中ごろ、新田開拓と水車業を目的として水車新田村が作られました。その後、都賀川上流の傾斜面の川水を利用して、灯油用として菜種を搾る水車業が盛んになりました。1800年代初頭以降、幕府の統制で原料となる菜種の入荷が減ったことや各地に水車業が興ったことから酒造用の米を搗く水車に転換し、灘の酒造り発展に大きな役割を果たしました。大正の末から昭和の初め頃、電気精米や蒸気精米が進むにつれ水車業は衰退し、今では「水車新田」という地名を残すのみとなっています。

※1 住居表示未実施地区：住居表示は、町をわかりやすくしたり郵便物を配達しやすくしたりすることを目的とした制度で、昭和37(1962)年5月10日に施行された「住居表示に関する法律」に基づいて各市町村が定めるものである。

住居表示制度が採用される以前、住居の表示には慣習的に地番を用いた表記が用いられてきたが、町界が道路などの実際の境と必ずしも一致しておらず、地番も整然と配列されていないため、住居の表示が非常にわかりにくいものとなっていた。このことが住民

の生活に不便を与え、各種行政事務の非効率の原因ともなっていた。この事実は特に全国の市街地について著しいため、市街地における合理的な住居表示制度の確立が急がれたという背景があった。

住居表示が実施されていない地域（住所表示未実施地区）は引き続き地番を用いて住所を表しており、実施地域か否かについては、各自治体の公式サイトなどで確認できる。

一方で住居表示に際してはわかりやすさが重視され、従来からの地名の保護体制がとられなかったことから、多数の歴史的な地名が消滅したので、戦後の「地名殺し」とも呼ばれる。その後、法律は一部改正された（第五条第2項、第九条の二など）。伝統的な両側町（道路や広場を挟んで両側に形成された町）、町内会など地域コミュニティとの関連性が失われたため、町内会組織や祭りなどの伝統的な組織や風土、慣習などへも影響を与えた。そのため一部の市町村では旧町名復活の動きがあり、実際に金沢市のように一部の町名を復活させたケースも出ている（旧町名復活運動）。

住居表示制度導入の可否を考える際、自治体は住居表示台帳（住居表示）と土地台帳上の台帳（従来の地番）の2種類を管理しなければならなくなり、混乱のもとになるとして否定的な自治体もある。

■ 「水車動力の父」田林宇兵衛が搾油水車を建設

幕末から明治にかけて日本の産業発展に水車は不可欠のエネルギー源として大きな役割を果たしますが、その嚆矢（こうし）となったのが灘の酒造業と、その前身となる同地での搾油業でした。灘には、現在も「水車新田」という地名が残されていて、今も「紀州の郷土・田林宇兵衛※2が菜種油を搾る水車を建設し、そこに五毛村庄屋・大利五郎右衛門らが新田を拓いた」という歴史が語り伝えられています。

『灘の歴史』によると、「六甲川の水は篠原村と八幡村の用水だったために、水の使用についての交渉は難航、享保12（1727）年、東尻池村（現・長田区）庄屋・理左衛門の仲介により、水車の位置や夏季の運転制限などを条件として協定が成立したそうです。

しかし、田林家が計画段階で事業を譲渡したため、結局は地元の五毛村・大利次助（油屋）、原田村・松本善十郎（分銅屋）、同・伝次郎、大石村・七兵衛らが引き受けることになったとか。

水車の稼働が始まったのは同20（1735）年で、最盛期には25輦の水車が稼働し、菜種1万5千石（1石≒180.39ℓ）、綿実144万貫（1貫≒3.75kg）を搾っていたそうです。灘の水車は、水力が強く構造も頑丈で、吉野杉の良材を用いた高性能なものであったとのことです。

19世紀初頭以降は幕府の統制強化で原料の菜種入荷が減り、また各地に水車業が興りすぎたこともあって、この時、酒造家の求めで酒米を搗く精米水車に転換することになります。精米水車利用の効果は絶大で、労働費用が節減され酒の生産量が増加しただけではなく、高度の精白により酒の質が飛躍的に向上、灘の酒は江戸で名声を博し、他産地の酒を圧倒しました。精米水車は明治維新後も栄えましたが、大正末期から昭和初期に電気・蒸気による精米に切り替わり、昭和13（1938）年の阪神大水害で多くの水車小屋が流され水車はそのほとんどが姿を消しました。

※2 田林宇兵衛：和歌山県紀美野町出身で「水車動力の父」とも呼ばれる。昭和13年（1938）京都市大の発行した研究誌に、紀州那賀郡高野領神野庄野中村の郷土・田林宇兵衛が、享保8年（1723）代官宛に、現・神戸市灘区の大石川（現・都賀川）上流に新田の開発を申請し、翌年には水車6、7輦の新設を願い出たという古文書が紹介されている。



図-1 六甲川沿川の地図

■ 表六甲の急流河川の成り立ちと諏訪山断層

そもそも、都賀川を含む表六甲の急流河川の成因は六甲変動によるものです。六甲山のあった場所は、元は低い丘でしたが、今からおよそ 100 万年前から六甲山一帯に東西方向の強い圧力が加わり、その結果、六甲は上昇して丘から山地に成長、その一方で大阪湾は沈みました（図-2 参照）。これを六甲変動と呼び、六甲山に多い断層はこの時にできたものです。しかも、六甲山は海辺近くにあることから比高も大きく、南斜面を流れる河川の勾配も急になります。

六甲変動に伴ってきた断層の一つである諏訪山断層は、六甲山麓を北東―南西方向に延びる活断層であり、地形的には直線的な断層崖が明瞭です。この断層崖を横切って流れる河谷は、右横ずれの屈曲を示しています。従来から、地形的に断層の存在が推定されていましたが、山陽新幹線の新神戸駅建設時にその存在が確認され、この断層は沖積層を変位させていることが明らかにされています。このように、諏訪山断層は右横ずれで北側隆起の逆断層成分を伴い、完新世^{※3}にも繰り返し活動したことが解明されています。

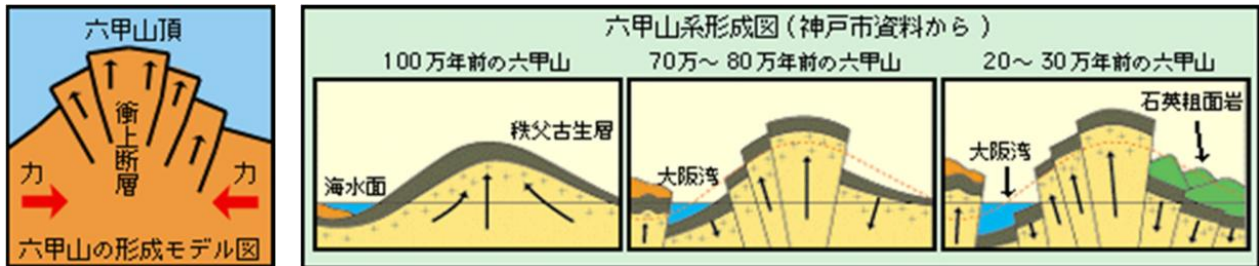


図-2 六甲山系形成図（『六甲 SABO HP～六甲山のおいたち』から引用）

六甲川では、大土神社から約 1km 南の勝岡橋直下で諏訪山断層の活動による右横ずれ地形の屈曲部（図-1 参照）が見られます。この地点は諏訪山断層の東端部付近に位置し、東側に分布する五助橋断層や岡本断層帯などに漸移する部分に当たります。

※3 完新世：最終氷期が終わる約 1 万年前から現在までを指し、第四紀の第二世にあたる最も新しい地質時代である。完新世の初期には、大陸氷床の融解によって海面が 130m 以上急激に上昇した。特に完新世の気候最温暖期と呼ばれる時代には、現在より 3m から 5m ほど海水準（陸地に対する海面の相対的な高さ）が高かったとされる（縄文海進）。その後、海面は緩やかに下降し、海水準は直近の 2,000 年ほどは比較的安定している。

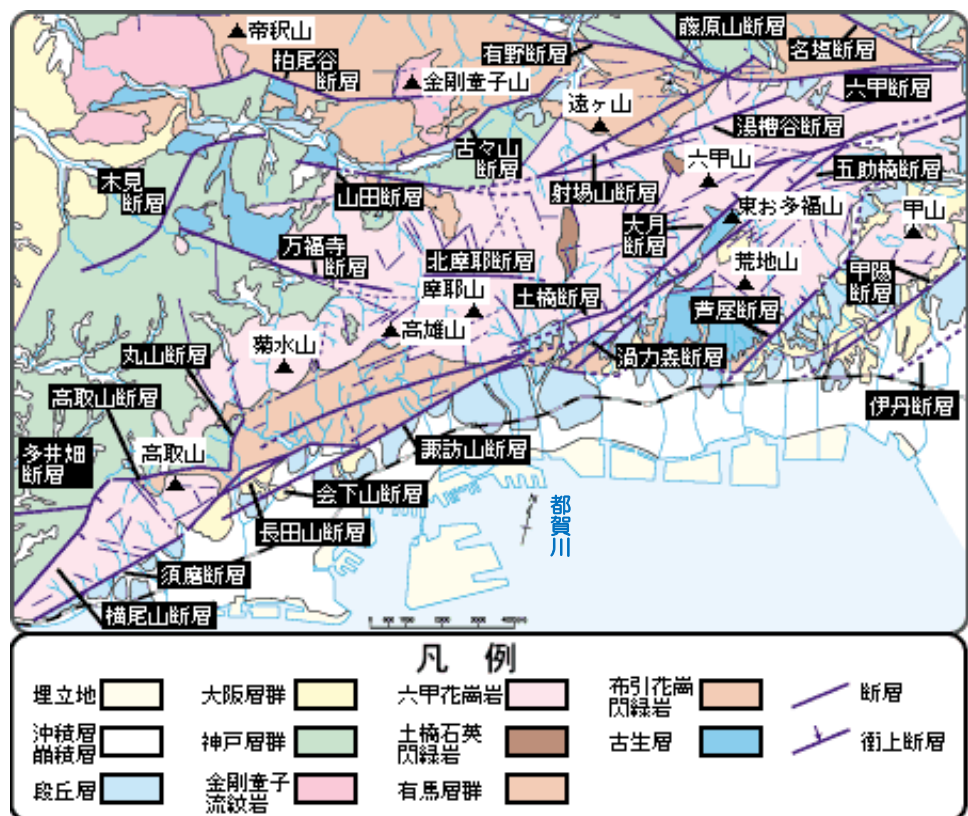


図-3（『六甲 SABO HP～六甲山のおいたち』から引用・加工）

■ モノローグ

写真-6 は、平成 31 (2019) 年 3 月、六甲川で撮影したカルガモです。河床の張石が流失して、そこにぽっかり穴が開いた状態で、そこで餌を採るためか何度も潜っているカルガモを撮ったものです。

このように、洪水により河床が洗掘されて穴の開いた箇所が六甲川に 3 ヶ所ほどあった記憶があります。今はもちろん塞がれているはずですが…。



写真-6 カルガモ

【参考資料】

- 1 『住居表示未実施地区一覧』 神戸市 HP 平成 30 年 12 月
<https://www.city.kobe.lg.jp/documents/1877/20240131shinchikutodokenituite.pdf>
- 2 『水車建設で灘の銘酒づくりの基盤を構築・田林宇兵衛（紀美野町）』 「生石高原の麓から」ブログ 令和 4 年 11 月
<https://oishikogennofumotokara.hatenablog.com/entry/2022/11/05/0000000>
- 3 『灘の歴史』 灘区 80 年史編集委員会編 平成 23 年 10 月
- 4 『六甲山のおいたち』 六甲 SABO HP
<https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/rokko/history.php>
- 5 『地震調査研究推進本部一事業報告書～諏訪山断層』 地震調査研究推進本部 平成 16 年度
<https://www.hp1039.jishin.go.jp/danso/Hyogo9/2-3-2.htm>
- 6 『水車新田、住居表示、両側町、石、貫、完新世、大土平町』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発刊：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.230

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.230

執筆者 松本 幸男

元兵庫県職員、元（株）日水コン職員